

福島敏夫隨筆集「乙戸南雜話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」
から

主宰論説14

クロネード・モネの庭園と邸宅の見学記

クロード・モネの庭園等を訪れた。その時の紀行文である。フランスの代表的な印象画家クロード・モネ（以下モネと略称する）の庭園と邸宅は、北フランスのノルマンデー地方のウール県のジヴェルニーというセーヌ川のほとりの村にある。そこを訪れて感心したのは、その広大な敷地の庭園と大邸宅である。庭園は、うまく川の水を利用し、いろいろな植物と花および池を配して、散策の際の自然の妙味を満喫できるようになっているようにならぬ情熱を感じた。日本の回遊式庭園の影響もあったようだ。モネは、【睡蓮】の花の絵で有名だが、結構、バラの花の名園も見事だと思われた。北フランスの地方であるので、このような広大な庭園の敷地を確保できたと思われるが、庭園の整備と維持については、モネの並々ならぬ情熱を感じた。日本の回遊式庭園の影響もあったようだ。モネの居住と画家としての活動を行つた、庭園に隣接する、邸宅も訪れた。そこに陳列されていた一連の作品、家具、調度品の多さと多彩さには驚かされた。特に、日本の江戸時代の浮世絵のコレクションの多さには目を見張った。時代と国境を越えた日本とフランスの文化伝統の結びつきに、感じ入った次第である。

平成 24 年 6 月 23 日

俳句：紫陽花やフランス画への想いかな

令和 2 年 12 月 16 日

その後 10 年経った。日本でも、モネの庭園に似たものが、各地にあるようだ。東京の六義園、高松の栗林公園、福岡の大濠公園など、山水式庭園とまではいかないが、人口の島を配した回遊式庭園は、日本的な散策の感覚と調和したものかと思われる。

俳句：散策に島を配した小道かな

都市火災

今度は、糸魚川市の都市火災のようですね。小さい頃、自分の家と小学校校舎が、火事で焼失し、隣の魚津市も、大部分が焼失してしまったことを悲しく思い出します。ですが、それにめげずに、生き抜いた竹馬の友、同級生等を、懐かしく思い出します。建築も、人を引きつける素晴らしい意匠性だけでなく、地震とともに、火事の災害の防止ということも忘れないでもらいたい。ですが、生物種の多様性喪失、砂漠化や風・水害の頻発、固体・液体・気体廃棄物の大量発生等の地球環境問題への対応も重要なことです。ともすれば、嫌気がすることも多いけど、夢と希望を持って、やりたいものです。

平成 28 年 12 月 22 日

短歌：真夜中の空を赤く染め火事を知らせるサイレンの音

令和 2 年 12 月 16 日脱稿

梅と桃と桜

今年は、一昨年、昨年に続いて、寒い日が 2 月から 3 月上旬まで続いたが、その後ぽかぽか陽気もあって、3 月中旬からは、梅、桃、桜が、相次いで開花した。桜に至っては、例年より 1 週間ぐらい速い開花となり、久しぶりに春の花見を楽しんだところも多かったようだ。日本では、梅と桜を愛でることが多いが、中国の昔の長安(現在の西安)の都では、桃の花の方を愛でることが多かったといわれている。風土に応じた感受性の違いかもしれないと考えられる。ところで、これらの花が開花するには、一定期間低温に置かれる必要があり、その後の温度上昇の変化を外部環境からの信号としてとらえ、春を感じ取って、咲き出すらしい。開花のための生命プログラムがあるということだ。考えて見ると、生物には、生き抜くためのそのようなプログラムがあるらしい。遺伝子の中に組み込まれているのか、不思議な気がする。

平成 25 年 3 月 25 日

令和 2 年 12 月 16 日脱稿

今年は、新型コロナ肺炎ウイルス禍に振り回された。建築でも、空調と換気の両立方法が迫られたようである。されど、年の瀬になって、大寒波の襲来と大雪である。伝染病と自然災害と経済の同時克服は、なかなか難しいのかもしれないが、最良の方策を考えて、沈静化を願いたいものである。

令和 7 年 12 月 29 日追記

山茶花が咲く季節である。散歩の際、民家の生け垣には、白色の山茶花が、ほぼ5分咲き、近くの公園の境界の赤色の山茶花は、やはり5分咲き位である。例年に比べると、少し開花が遅いかなと思う。やはり、ステップ応答的な温度の急激な変化が、開花するための信号として必要なのかもしれない。

